

機関番号：11301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20791693

研究課題名（和文） 外来進行がん患者の終末期医療に対する希望の推移と評価に関する  
コホート研究研究課題名（英文） A cohort study to describe preference of end-of-life care in cancer  
patients.研究代表者 宮下 光令 (MIYASHITA MITSUNORI)  
東北大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号：90301142

## 研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は外来がん患者の終末期医療に対する希望を明らかにし、その推移を検討することである。310 人の外来がん患者がコホートに組み入れられた。ベースライン調査でがん患者の希望が明らかになり、医師、看護師との違いが明確になった。経時的な調査では希望の多くの項目はあまり変化しなかったが、抗がん治療に対する希望は減少した。

## 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to clarify preference of end-of-life care in cancer patients in outpatient clinic setting and explore longitudinal change. Three thousand and ten patients were recruited in the cohort. In the baseline survey, we clarified preference of end-of-life care in cancer patients. Some items were different from physician and nurse. In the longitudinal follow-up, most items did not change however preference of anti-cancer therapy decreased.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：緩和ケア看護学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：医療・福祉、看護学、癌、緩和ケア、終末期医療

## 1. 研究開始当初の背景

生命に危機のある疾患に関係した問題に直面している患者の生活の質を向上させるためには終末期医療の充実が重要な課題である。特に、治癒が見込めない患者に対しては、患

者の希望に沿った適切な医療を提供することが必要となる。しかし、わが国の死因のトップである進行がん患者の終末期医療に対する希望については殆ど調査研究がなされていない。

近年、欧米では、終末期医療に対する希望を患者・家族の立場から明らかにする研究がすすめられてきた。

我々は文化・社会的・医療制度などの背景の違いから、わが国における終末期医療への希望を明らかにするために質的研究から項目を作成し、一般集団 2662 人および遺族 525 人を対象とした質問紙調査を行った。その結果、終末期医療への希望として多くの人に共通した概念として「苦痛がない」「望んだ場所で過ごす」「家族とのよい関係が保たれる」「医療者とのよい関係」「自立している」「負担にならない」「明るさを失わず過ごす」「尊重される、尊厳が保たれる」「心の残りがいない」「静かに、眠るように死を迎える」といった概念が同定された。しかし、これらの調査は一般集団及び遺族を対象としたものであり、わが国の死因のトップである（進行）がん患者の終末期医療に対する希望は明らかにされていない。また、終末期医療に対する希望は、経時的に変化すると言われているがそれも明らかになっていない。

## 2. 研究の目的

放射線科外来を受診するがん患者の終末期医療に対する希望を調査する。またその患者を追跡し、経時的な変化を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究の方法はコホート研究である。対象は大学病院放射線科外来を受診するがん患者とし、適格条件は（1）患者の受診する主たる疾患が「がん」である。（2）患者が20歳以上である。（3）患者が身体的・精神的に脆弱ではなく調査への回答が可能であると主治医が判断できる。（4）患者に視覚障害や身体障害がなく、調査票への記入が可能である。（5）患者が調査への参加に同意しているとした。

追跡期間は3年間とし、各年度において患

者の終末期医療に対する希望に関する自記式質問紙調査を行った。調査票は東京大学医学部附属病院の放射線科外来において配布した。具体的には外来主治医によって簡単な説明と配布を行い、調査への参加を同意したものは次回外来時に回答した調査票を持参するか、同封した封筒で返信することを求めた。調査票とともに、依頼状と趣意書を配布し、患者が調査への参加を判断した。なお、医学的情報については診療記録類から別途情報を得た。調査項目は一般集団を対象とした先行研究から同定された「望ましい死のあり方」に関する 57 項目および終末期の療養場所、余命告知に対する希望、平井らによって作成された死生観尺度である。調査の実施にあたり 500 円相当の協力謝品を回答者に渡した。本研究は当該施設の倫理委員会の承認後に実施された。

## 4. 研究成果

大学病院放射線科外来を受診中のがん患者 310 名が対象となった。ベースラインでの対象者の年齢は  $62 \pm 14$ 、性別は男が 58%、女が 42%であった。全身状態（KPS）は  $90 \pm 10$  であり、治療状況は治療前 4%、根治治療中 13%、緩和目的 7%、フォローアップ 76%であった。追跡調査では年齢は  $61 \pm 14$ 、性別は男が 56%、女が 44%であった。全身状態（KPS）は  $92 \pm 9$  であり、治療状況は治療前 3%、根治治療中 10%、緩和目的 1%、フォローアップ 87%であった。

がん患者が望ましい死を迎えるために重要だと回答した割合は以下のとおりである。からだに苦痛を感じないこと（92%）、おだやかな気持ちでいられること（97%）、望んだ場所で過ごすこと（93%）、信頼できる医師にみてもらえること（96%）、安心できる看護師がいること（96%）、楽しみになることがあること（96%）、人に迷惑をかけない

こと (89%)、家族の負担にならないこと (88%)、家族と一緒に過ごすこと (89%)、身の回りのことが自分でできること (93%)、静かな環境で過ごすこと (85%)、生き方や価値観が尊重されること (89%)、こころ残りが無いこと (81%)、自然に近いかたちでさいごを迎えること (88%)、会いたい人に会っておくこと (70%)、生きていることに価値を感じられること (89%)、仕事や家族としての役割を果たせること (83%)、死を意識せずに普段と同じように毎日を送れること (88%)、やるだけの治療はしたと思えること (89%)、さいごまで病気とたたかうこと (81%)、家族やまわりの人に弱った姿をみせないこと (66%)、先々何がおこるかをあらかじめ知っておくこと (63%)、信仰を持っていること (31%) であった。

この結果をほぼ同時に行われた当該地域の一般市民、医師、看護師に対する調査と比較すると、多くの項目が同様の傾向を示したが「やるだけの治療はしたと思えること」「最後まで病気とたたかうこと」などの抗がん治療に対する希望はがん患者、一般市民のほうが医師、看護師に対して高く大きな意識の乖離がみられた。また、「先々何がおこるかをあらかじめ知っておくこと」「会いたい人と会っておくこと」などの死の準備に対する項目は医師、看護師が高くがん患者では低かった。これらから、医療者はがん患者の終末期医療に対する希望、特に抗がん治療に対する希望を強く認識して治療やケアにあたる必要があることが示された。

追跡調査により統計学的に有意に変化した変数は以下のとおりである「おだやかな気持ちでいられること (減少)」「信頼できる医師にみてもらえること (減少)」「医師と話し合っ

て治療を決めること (減少)」「自分の気持ちをわかってくれる人がいること (増加)」「家族から支えられていること (上昇)」「亡くなる時に家族がそばにいること (減少)」「明るさを失わずに過ごすこと (減少)」「楽しみになることがあること (減少)」「希望をもって過ごすこと (減少)」「さいごまで病気とたたかうこと (減少)」「やるだけの治療はしたと思えること (減少)」「できるだけ長く生きること (減少)」であった。これらは統計学的に有意であっても、その変化量は小さかった。多くの項目で変化がなかったが、「さいごまで病気とたたかうこと」などの抗がん治療に対する希望は減少の幅が比較的大きかった。これは年を経ることによって全身状態の悪化などが影響として考えられた。

また 1 年後の追跡時の生存例と死亡例でベースライン時の希望を比較した結果、有意に異なっていたのは「家族に気持を伝えられること (死亡例が高い)」「家族と一緒に過ごすこと (死亡例が高い)」「亡くなる時に家族がそばにいること (死亡例が高い)」「静かな環境で過ごすこと (死亡例が高い)」であった。この結果から患者の死期が近い状況では、患者は家族との関係性をより強く求めることが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 2 件)

1. 宮下光令, 川上祥子, 加藤大基, 中野貴美子, 中川恵一. 放射線科外来がん患者の「望ましい死」に関する認識の変化: 1 年半のコホート追跡研究. 第 48 回日本癌治療学会学術大会. 2010 Oct 28-30, 京都.

2. 宮下光令, 加藤大基, 川上祥子, 中野貴美子, 中川恵一. がん患者、一般市民、医

師、看護師の「望ましい死」のあり方に関する認識. 第 47 回日本癌治療学会学術集会  
2009 Oct 22-24, 横浜. (最優秀演題賞)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権] (計 0 件)

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮下 光令 (MITSUNORI MIYASHITA)

東北大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号 : 90301142